

院内看護研究の指導過程における 研究的視点の啓発と支援

伊 藤 洋 子

Enlightenment and Support of Research-oriented Views for
Instructing In-hospital Nursing Study

Yoko Itoh

要旨：筆者がかかわったH病院の平成14年度から平成17年度までの看護研究の19事例を対象に、看護研究計画書作成段階での課題と指導内容・指導方法や看護研究の成果の活用について整理・分析した。看護研究計画書作成段階では、研究動機を研究テーマに活かさない、用語の定義や概念枠組みが明瞭にならないといった研究課題を導いていくまでの思考の道筋の理解が不十分であるので、研究計画書作成の初期で、文献検討や予備研究などによって得られた知見を指導すると解決されやすいことがわかった。研究成果の活用では、感染予防の4例、患者教育や自己管理支援の4例、家族ケアの2例、看護管理の2例など、看護ケアの質の向上となるものであった。また、19例中9例の看護研究が院外の学会に発表されていた、これらの研究活動との関わりを通して、筆者自身も臨床での今日的課題を再認識することができた。

Key words：院内看護研究 (In-hospital nursing study), 指導過程 (instruction process), 立証的研究 (empirical study), 研究的視点 (research-oriented views), 支援 (support)

はじめに

臨床現場の看護師は、看護研究に取り組む必要性を認識し、実際に看護学会や研究会、また雑誌などのほか、院内研究発表会で発表を行っている。それらの看護研究により、看護技術面や看護管理面の質の向上、研究方法の発展などの成果を得ている。また、看護師が看護研究に取り組むことは、問題抽出からその解決に向かう研究過程は看護過程と連動しており、教育的意義があるとも考えられている。その一方で、「研究のための研究になっている」、「研究の積み重ねができていない」、「研究方法に問題がある」など、効果的な研究活動が行われていないとの指摘もある。

杉下らは、「研究本来の目的に沿って主体

的動機から出発することが必要である。また、そのためにも内発的動機づけへのアプローチも、研究指導上重要と考える」¹⁾と述べ、指導する側がビジョンをもち、教育的視点に立たない限り、研究者に内発的動機づけへのアプローチが効果的に行われないとの見解を示している。

また、D. ディナーは、「研究には、吟味された知識に基づいた、規則や慣例があり、試し抜かれた技術があるので、研究そのものはそれほど難しいものではない。」²⁾と述べている。つまり、研究の基本的なプロセスを踏まえて進めると、決して難しいものではないとの考えを示し、「難しいのはむしろ、なぜその研究をするのか、いつ、どこで、だれと、どんな目的を持ってするのかということであ

り、また、研究と看護をどのように結びつけるのかということ³⁾と述べ、看護実践に何らかの形で役立つ研究を目指す必要性を説いている。

本研究ではこれらの知見を拠りどころに、筆者がH病院の教育委員会からの依頼で平成14年度から平成17年度まで、院外講師として院内看護研究(以下、看護研究と略す)の指導に携わった4年間を振り返り、看護研究計画書作成段階での課題と指導内容・指導方法、看護研究の成果の活用について検討を行うとともに、今後のH病院での看護研究における研究的視点の啓発と支援のあり方についての見解を述べる。

I. 研究目的

1. H病院の平成14年度から平成17年度までの、看護研究の研修の実際を検討する。
2. 看護研究計画書作成段階での課題を19事例ごとに分析し、より適切な指導内容・指導方法について検討する。
3. 過去4年間の看護研究の推移と研究成果の臨床への活用状況、及び院外での看護研究発表の状況を明らかにする。
4. 2.と3.の分析を通し、看護研究の研究的視点の啓発と支援のあり方について、考察する。

II. 研究対象

1. 平成14年度から平成17年度の研修内容及び研修方法
2. 平成14年度から平成17年度の看護研究計画書19件。

III. 研究方法

1. 19件の看護研究計画書作成段階の7事項(①研究テーマの表記・研究目的、②問題提起・動機、③文献検索、④用語定義、⑤概念枠組み、⑥研究方法、⑦データ分析)について分析し、看護研究計画書作成の難

しさに関連する要因を明らかにする。

2. 看護部に研究成果の活用状況や学会発表の有無について聞き取り調査を行い、看護研究の活用と継続に影響を及ぼす要素を明らかにする。
3. 倫理的配慮

看護部の総看護師長に研究目的と趣旨、本研究以外に用いないことを説明し、承諾を得た。なお、T氏に聞き取り内容(研究成果の活用状況や学会発表の有無)の概要を説明し、了解を得た。

IV. 結果

1. 「看護研究」研修の実際

看護研究の研修は、「看護の質的向上を目指し、研究の実際を学ぶ」を目的に行っている。その到達目標は、①研究を通して、看護の科学を追及できる。②研究を通じて、院内外の情報交換を行うとともに研究能力の向上をはかる、の2点である。看護部では、看護研究を現任教育の一環として位置づけ、全看護師が研究に取り組むシステムとなっている。

看護研究の研修内容及び研修方法(表1)は教育委員長と筆者とで研修者の現状に合うように検討を重ね、目的と到達目標に対する認識のずれが生じないように配慮して研修を

表1 研修の実際(平成14年度～平成17年度)

月 日	研修内容・研修方法
3月	H病院の教育委員長との年間の研修会についての検討 ・研修時期、研修内容、研修方法
5月～6月	看護研究計画書提出；看護研究計画書の添削(グループ毎の研修) ・文献検索の方法、研究手法等
10月	中間指導(グループ毎の研修) ・研究のまとめ方、プレゼンテーションの仕方等
11月	研究発表会(集団研修)
2月	論文作成(集団研修)、クリティック(平成16年度から企画) ・論文作成のルール

実施したものである。研修の受講参加人数は、集団研修の場合、毎回平均40名前後であった。

看護研究の研究実施者のメンバーは、1研究グループは卒後2年目の看護師を主研究者に、共同研究者そして臨床経験年数10年以上のベテランの看護師2～3名で編成されている。看護師の看護研究への取り組みの機会を均等に設け、ある程度経験を積んだ看護師には、共同研究者としてのサポートやリーダー的な役割が期待されていた。しかし、看護師は学生時代以降、看護研究の経験が少なく、研究手法に慣れていないため、研究意欲や取り組みたい研究テーマがあっても、なかなか研究に着手できない状況であった。

筆者への指導の依頼内容は、看護研究の研究過程が円滑にすすみ、研究過程での思考の転換ができ、研究への意欲を高めてほしいなど、多岐にわたっていた。

2. 看護研究計画書作成段階の分析と指導内容

表2は、「看護研究計画書作成段階から研究成果の活用まで」を総括したものである。ここではまず、そのなかの「研究テーマの表記・研究目的」から「データ分析」までの7項目について、項目毎に結果と指導内容を解説する。

1) 「研究テーマの表記・研究目的」

19グループの「研究テーマの表記」のうち、C・D・F・H・K・M・N・O・Qの9グループについては、いずれも従属変数・独立変数が共に読み取れ、研究目的も明確であった。B・G・R・Sの4グループについては、「テーマ・研究目的」を読んでも従属変数を読み取ることができなかったためテーマを変更した。他の6グループについては、研究目的が比較的わかりやすく記述されていたのでテーマを一部修正するに留まった。なお、Rグループ「コミュニケーションの中の呼吸はずし」に関しては、先行研究も見当たらず、概念整理

ができなかったため、研究テーマを変更した。

B・G・R・Sの4グループの研究実施者には、「テーマの見つけ方」の具体的な方法について解説した。まず、普段興味のあることや気づいた問題、疑問、課題をリストアップすることや研究の意義を検討するためにも文献検索を行うことなど、研究テーマを設定する手順について説明した。

テーマ設定に際してはキーワードを活用し、研究の目的と方法と対象の3要素を意識して成文化するように指導した。例えば、Bグループ「慢性精神疾患患者のセルフケアへの援助」のテーマは、従属変数である患者のセルフケア能力を判断する基準が曖昧であり、研究で明らかにしたいことが明確ではなかった。そこで、オレム・アンダーウッド論のデータベースを用いて、看護介入することにより、患者のセルフケアの自立度をアセスメントできると考えた。修正例のテーマのように、「オレム・アンダーウッド論をデータベースに用いたセルフケア能力の向上への支援」となった。なお、研究の対象の明記については、オレム・アンダーウッド理論の対象概念が慢性精神疾患患者であることを考慮し、敢えて研究テーマとして表記しなかった。

2) 「問題提起、動機」

C・D・F・H・K・M・N・O・Qの9グループについては、先行研究での検討を踏まえ、患者や家族、看護師などの医療従事者、社会などに何らかの利益をもたらすといった研究の意味・意義・位置づけとなる問題提起や動機が記述されていた。

B・G・R・Sの4グループについては、先行研究で何が明らかにされ、今後、何を解明すべきかなどの研究の意義について明確ではなかった。例えば、Sグループの「看護師の注射用抗悪性腫瘍剤の取り扱いに関する調査からの課題を探る」のテーマでは、注射用抗悪性腫瘍剤に対する看護師の知識不足や手技の未熟さなどから、注射行為をする際に個

表2 看護研究計画書の作成段階から研究成果の活用までの総括表

上段：指導後 下段：指導前

区分	①テーマの表記	②研究目的	③問題提起	④動機	⑤文献検索数	⑥用語定義	⑦概念枠組み	⑧研究方法	⑨データ分析	⑩研究成果の活用	⑪研究者の卒後年数
平成14年度	A ①	糖尿病性透析患者の自己管理への動機づけ 透析困難症を呈する患者へのアプローチ	患者指導を行い自己管理への意識づけを図る	体重増加を是正するための、患者指導	自己コントロール不足による透析の中断	9 YAHOO 3	安定した透析透析困難症	図式化 事例研究 ↓ 患者1名	患者・看護師の関わりの記録	自己管理ができない患者の援助の手がかりとなっている ○学会発表	主研究者：4年 共同研究者 2年, 19年, 20年
	B ②	オレム・アンダーウッド論をデータベースに用いたセルフケア能力向上への支援 慢性精神疾患患者のセルフケアへの援助	患者のセルフケア能力を明確化できるデータベースの作成に取組む	セルフケア能力を判断する基準の不明確さ	慢性精神疾患患者の自立支援と社会生活への復帰	7 医学中央雑誌 4	セルフケア慢性精神疾患患者	図式化 調査研究 ↓ 患者8名	事例ごと記述内容	データベースは作成されたが、従来の記録との整合性が十分でないため活用されていない	主研究者：2年
	C ③	手術を受ける患者の家族が感じる不安とは 一手術待ち時間に感じること	手術を待つ家族の不安の実態を明らかにし、効果的な援助を考える	手術を受ける患者の家族が手術終了までに抱く不安	家族が手術待ち時間に不安を増強させる因子の分析	5 医学中央雑誌 3	不安 家族 術中訪問 待ち時間	図式化 調査研究 ↓ 患者の家族14名 (倫理的配慮の明記)	アンケートによる相関関係	家族への術中訪問による不安の緩和を図ると共に、手術待合室の設置など、家族ケアの充実につながっている ○学会発表	主研究者：2年 共同研究者 1年, 4年, 12年
	D ④	留置針の長期留置による感染リスクの検討 一留置針の定期交換(刺しかえ)の必要性について	留置針の留置期間と感染の相関の有無およびH病院現任看護師の留置針留置の危険性に対する意識調査を行う	現在行われている留置針管理方法の安全性を高めるための留置針管理法の策定	麻痺や意志表示がしにくい高齢者を対象に留置針の挿入による感染症の危険性	6 医学中央雑誌 4 MEDLINE	留置針	×	調査研究 ↓ 患者48名 看護師58名	細菌培養の結果分析およびアンケートによる母集団調査	CDCガイドライン(2000)の感染対策に基づき、感染マニュアルを作成し、留置針挿入患者の感染予防の指針を策定する ○学会発表

伊藤：院内看護研究の指導過程における研究的視点の啓発と支援

区分	①テーマの表記	②研究目的	③問題提起	④動機	⑤文献検索数	⑥用語定義	⑦概念枠組み	⑧研究方法	⑨データ分析	⑩研究成果の活用	⑪研究者の卒後年数
平成 15 年度	E ④ 緑茶を用いた口腔ケアについての一考察 ・寝たきり患者様の口腔ケアにおける緑茶の効果	口腔ケアにおける緑茶の殺菌効果を明らかにする	緑茶に含まれるカテキンの殺菌作用	イソジンガーグルに代わる緑茶による口腔ケアの検討	9 YAHOO 3	口腔ケアの方法 カテキンの抽出方法	×	事例研究 ↓ 患者3名	細菌培養の結果分析	緑茶を用いての口腔ケアは、舌苔の発生の軽減や口臭予防にもつながる効果的なケアである	主研究者：2年 共同研究者： 2年, 3年, 18年
	F ① 看護職を継続するための要因 －看護職継続と人生の転機との関連性－	既婚・未婚看護師の継続意識の相違点を明らかにし、働きやすい職場環境作りに活用する	H病院における既婚看護師が人生転機を迎えても継続できた要因を探る	既婚看護師の生活背景から看護職継続の要因を分析	7 医学中央雑誌 4	継続 転機	図式化	調査研究 ↓ 既婚看護師41名 未婚看護師28名 (倫理的配慮の明記)	半構成質問紙による比較調査	継続要因には家族によるサポートのみではなく、行政支援システムの充実を促す契機となる ○学会発表	主研究者：2年 共同研究者 12年, 18年, 30年
	G ② 環境変化が患者に与える影響 －不食のある患者を通して－ ・家族の関わりが患者に与える影響とは －拒食のある患者を通して－	不食患者および家族に対する自宅外泊などの環境変化の影響を知る	痴呆で不食状態にある患者に対する関わり方	入院以来、食べ物を口にしない患者への援助	5 医学中央雑誌 3	不食	×	事例研究 ↓ 患者および家族1名	プロセスレコードの記述内容の分析	自宅外泊による環境変化は、効果的な援助となり継続的に実施されている ○学会発表	主研究者：2年 共同研究者 2年, 3年, 8年
H ③ 整形外科疾患における床上下リハビリの意識づけ －パンフレットを用いての試み－	パンフレットを活用することで、患者に早期リハビリの必要性の意識づけを図る	パンフレットを媒体としたリハビリへの取り組みの効果	統一したパンフレットを活用した床上下リハビリの実践	4 医学中央雑誌 2	パンフレット	文章	調査研究 ↓ 患者10名	半構成質問紙による母集団調査	リハビリテーション対象の患者に対し、パンフレットの活用は意識づけとともに行動変容につながるのと有効性が認められ、活用されている	主研究者：2年 共同研究者 3年, 18年	

区分	①テーマの表記	②研究目的	③問題提起	④動機	⑤文献検索数	⑥用語定義	⑦概念枠組み	⑧研究方法	⑨データ分析	⑩研究成果の活用	⑪研究者の卒後年数
平成15年度	I ③ 化学療法を受ける患者の口腔ケア ー口腔ケアを事前に行った症例を通しての考察ー	化学療法を行う患者が口腔ケアを行うことによって、口腔内異常の発生頻度の減少をはかることができるかを明確にする	化学療法中の患者に対する口腔ケアによる口腔内炎の発生頻度の減少と口腔ケアマニュアルの必要性	化学療法中の患者に対し、冷水による含嗽・歯磨きなどの口腔ケアの事前の実践による症状の改善	5 医学中央雑誌	口腔内異常 口腔ケア 化学療法	×	事例研究 ↓ 2名	WHOの口腔内炎診断基準を用いて、患者の口腔内炎の発生頻度の分析	口腔内が乾燥状態である患者に対し、冷水による含嗽を行った結果、口腔内炎による痛みの緩和やその発生頻度が減少し、継続的に行われている ○学会発表	主研究者：2年 共同研究者 1年, 24年
	化学療法を受ける患者の口腔ケア ー予防的ブラッシングに着目してー			3							
平成16年度	J ③ 患者の意思決定を支援するための一考察 ー癌患者の症例を通してー (仮) 患者・家族の意思決定を支援するために	癌患者に対する身体症状の変化や治療方針の変化に伴う不安への支援と患者・家族の意思を尊重した関わり方を知る	“お任せ医療”の考えが定着している現状のなか、患者・家族の意思を尊重することができる援助	専門知識がないために受身の立場にある患者・家族の言葉を振り返り、援助のあり方を考察	9 YAHOO	インフォームドコンセント セカンドオピニオン	図式化	事例研究 ↓ 1名	患者・看護師の関わりをプロセスレコードにより分析	地域性や高齢により閉鎖的な考え方をする患者に対し、看護師が仲介となり医師に患者自身の想いを告げられるまでの過程を振り返っている ○学会発表	主研究者：3年 共同研究者 8年, 16年
					3						
平成17年度	K ④ 脳出血後遺症患者を対象とした音楽療法の取り組みとその効果 (仮) 脳出血後遺症患者を対象とした音楽療法の効果と実態	音楽を提供することによる心身変化および機能向上の可能性を探る	リハビリ期にある脳出血後遺症患者のADL拡大	音楽療法を導入することによる心身機能の活性化	6 医学中央雑誌	受容的音楽療法 能動的音楽療法	×	事例研究 ↓ 1名	ビデオに撮影された映像とセラピストによる参加観察	脳出血後遺症患者に対し、音楽療法を行った結果、身体機能の活性化と癒し効果が認められる ○学会発表	主研究者：2年 共同研究者 2年, 3年, 25年
					4						

区分	①テーマの表記	②研究目的	③問題提起	④動機	⑤文献検索数	⑥用語定義	⑦概念枠組み	⑧研究方法	⑨データ分析	⑩研究成果の活用	⑪研究者の卒後年数
平成16年度	L ② 対応困難な患者に対するプロセスレコードの活用 精神看護におけるプロセスレコード ートラベルビー理論によって-	プロセスレコードを活用することで、対象理解を深め、チームで統一した看護援助のあり方を考える	精神症状を呈する患者への対応や症状把握が看護師間で異なっている現状の改善	患者情報の共有ができないため、患者への対応や症状把握に相違が発生	5 書籍 5	プロセスレコード 不穏状態	図式化	調査研究 ↓ 看護師8名 患者2名	アンケート調査 患者・看護師の関わり の記録	プロセスレコードを媒体にカンファレンスを行うと、患者の精神症状の把握が密になり、共有化もできる ○学会発表	主研究者：2年 共同研究者 12年, 19年, 22年
	M ① 当直勤務における看護師のストレスの実態調査 当直勤務における看護師のストレス	看護師の当直勤務におけるストレス要因を明らかにし、病院環境改善資料の一助とする	当直勤務における看護師の不安や緊張から生じるストレス要因の明確化	看護師のストレスの要因分析から当直勤務における問題点の明確化	7 医学中央雑誌 4	ストレス 当直勤務	図式化	調査研究 ↓ 看護師19名 (倫理的配慮の明記)	Pinesのバーンアウトスケールを一部改変	ストレス要因は、「患者数(4)」、「緊急性の高い重症患者の対応」、「患者の非協力的な態度」で、業務内容によるバーンアウト指数の偏りはない	主研究者：6年 共同研究者 20年, 24年, 28年
平成17年度	N ② 神経科病棟における看護師の陰性感情の具体化 -アンケート調査による意識づけ- (仮) 神経科病棟における看護師の陰性感情の具体化 -アンケート調査による意識づけ-	看護師自身の陰性感情の意識化についての調査を行い、患者や職員への対応について考察する	日々の看護場面で患者に抱く陰性感情を知り、その対応について考察	看護師の陰性感情を意識調査することにより自己を振り返る	14 書籍・学会誌 4	陰性感情	×	調査研究 ↓ 看護師16名	アンケートによる母集団調査	看護師の多くが自己の陰性感情に気づき、それを持ちながら患者に関わっていた。陰性感情を抱く患者に対する看護師の対応に関する研究が検討されている	主研究者：2年 共同研究者 3年, 6年

区分	①テーマの表記	②研究目的	③問題提起	④動機	⑤文献検索数	⑥用語定義	⑦概念枠組み	⑧研究方法	⑨データ分析	⑩研究成果の活用	⑪研究者の卒後年数
平成17年度	透析体操を取り入れたことによるQOLの変化 -NHKのみんなの体操を試みて- (仮)透析体操を取り入れたことによるQOLの変化 -透析準備時間を利用して-	透析準備時間に透析体操を導入することによるQOLの変化を明らかにする	NHKのみんなの体操を透析体操として導入し、長期透析患者のQOLの向上への影響	1980年代に欧米で始まった運動療法の効果を踏まえ、腰痛や下肢痛の緩和対策	17 雑誌, 学会誌 4	透析準備時間 透析体操 長期透析患者	×	調査研究 ↓ 外来透析患者17名	SF-36の質問項目を各点数化し、平均値を求める 統計学的分析はt検定(P>0.01) 国民標準値と比較する	透析体操前後におけるSF-36を用いたの評価では有意差はみられなかった。患者からは肯定的な評価が得られたので透析体操は実践されている	主研究者：9年 共同研究者 7年, 19年, 24年 25年
	床上安静を必要とする患者の排泄援助についての検討 床上安静を必要とする患者の援助について考える	排泄介助の際、患者・看護師の思いにどのような差が生じているのかを明らかにする	治療目的での床上安静時の排泄援助に対する患者の思い	排泄の援助を他人に委ねる精神的苦痛を理解した排泄の援助のあり方	3 雑誌, 学会誌 3	床上安静	×	調査研究 ↓ 排泄の援助を受けたことのある患者31名 看護師16名	アンケートによる母集団調査	患者は排泄援助に対し、精神的苦痛以外にも、安楽な技術提供を臨んでいることが明らかになり、具体的方法の研究の必要性が示唆される ○学会発表	主研究者：2年 共同研究者 2年, 9年, 12年
	膀胱留置カテーテルの交換時期についての一考察 (仮)膀胱留置カテーテルの交換時期についての一考察	膀胱留置カテーテルの交換時期を検討し、マニュアルを作成する	膀胱留置カテーテルによる感染症の発生頻度が高い現状の改善を図る	膀胱留置カテーテルの交換時期が統一されていない状況の改善	12 雑誌, 学会誌 7	膀胱留置カテーテル 感染兆候 尿路感染	×	調査研究 ↓ 膀胱留置カテーテルを使用している患者4名 (倫理的配慮の明記)	尿検査の細菌数	膀胱留置カテーテル挿入患者の感染症は1~2週間という短期間でも細菌が検出されるので、膀胱留置カテーテルの交換の必要性が示唆される	主研究者：2年 共同研究者 2年, 4年, 10年

区分	①テーマの表記	②研究目的	③問題提起	④動機	⑤文献検索数	⑥用語定義	⑦概念枠組み	⑧研究方法	⑨データ分析	⑩研究成果の活用	⑪研究者の卒後年数
平成 17 年 度	R ②	「幻聴、幻想到支配された離棟行動」を繰り返す患者へのかかわりー自宅外泊の効果をみるー	「家に帰りたい」という願望充足的妄想に支配され、離棟を繰り返す患者に自宅外泊を提案・実施することによる影響を把握し、今後の援助に役立てる	慢性期には自我親和的妄想を呈する患者へ自宅外泊を試みることにより、精神状態が緩和するのではないかとの検討	4 学術学会誌、書籍	行動フローシート	×	事例研究 ↓ 患者1名	行動フローシートや看護記録を用いて、外泊の前後を4期に区分し、行動の変化を分析	自宅外泊の試みは、家族との触れあいによる安心感や主婦としての役割を達成できたとの満足感をもたらし、離棟行動を減らす援助として効果があることが明らかになり、継続的に行われている	主研究者：2年 共同研究者 4年, 29年
	S ③	看護師の注射用抗悪性腫瘍剤の取り扱いに関する調査からの課題を探る 注射用抗悪性腫瘍剤の取り扱いマニュアルの作成を試みて	H病院職員の抗癌剤取り扱いの現状からの課題の明確化にする	注射用抗悪性腫瘍剤の取り扱い方法が、それぞれの看護師により異なるという現状の改善	11 学術論文	注射用抗悪性腫瘍剤	×	調査研究 ↓ 看護師72名	アンケートによる母集団調査	注射用抗悪性腫瘍剤に対する危険性および取り扱い方法に対し、看護師の認識不足や全行程を看護師が担っているなどの課題が明らかになり、平成18年度には研修が行われる予定である	主研究者：2年 共同研究者 4年, 13年

注1) 「看護研究計画書の作成段階から研究成果の活用までの総括表」は、筆者がH病院の看護研究計画書ならびに院内看護研究発表会の資料を参考に作成する。

注2) 区分の○数字は、研究の倫理的配慮に基づきH病院の外来・病棟を指し示す。①は外来、②は1病棟、③は3病棟、④は4病棟である。

注3) 概念枠組み欄の×印は、図または文章で概念枠組みが表記されていないことを示す。

人差を生じる危険性があり、それを回避するためには注射用抗悪性腫瘍剤の取り扱い方法の基準化が必要であると考えていた。研究実施者は、文献に記述してある既知の方法以外にもっと現実問題の改善につながる対策はないかといった疑問や問題意識を抱いていたので、研究実施者との話し合いを行った。そして、研究の問題提起、動機が真に研究価値を有するものかどうかという判断の拠りどころとなる文献検討を十分にを行い、実現可能な研究に発展できるように助言した。

3) 「文献検索」

指導前後の文献検索数の変化を示したのが図(「文献検索数の変化」)である。文献検索数の変化については、指導前では3文献件数のA・C・E・G・I・J・P・Rの8グループが最も多くその割合は、42.1%を占めていた。次いで、4文献件数のB・D・F・K・M・N・Oの7グループで36.8%，2文献件数はH・Sの2グループであった。

文献検索が少ない理由は、研究実施者が、研究の準備段階で研究テーマを絞り込み、研

究課題を明確にする必要性や研究計画を具体化する時点での文献の重要性に気づきながらも研究論文の入手先や検索方法、研究論文を研究的な視点で読み取る知識と技術が不足していた。

したがって、指導ではキーワードを用いての文献検索方法が妥当であるか、研究論文を精読し、過去の研究状況を押さえることができているかなどを助言すると、指導後には、文献件数10以上が4グループと著しく増加した。次いで、7文献件数が4グループ、5文献件数が4グループとなった。このような文献調査により、「問題提起・動機」での文献活用ができ、研究の方向性を見出すことができ、取り組む研究がもつ看護領域の知識や看護実践での意義を明確にすることにもつながった。

文献検索システムでは、「医学中央雑誌」が9(47.4%)で学術雑誌に掲載してある研究論文が高い割合を示し、次いで、学会・研究会、あるいは看護協会が発行する発表抄録集や演題抄録集の発表要旨であった。また、Dグループのように「MEDLINE」を検索する

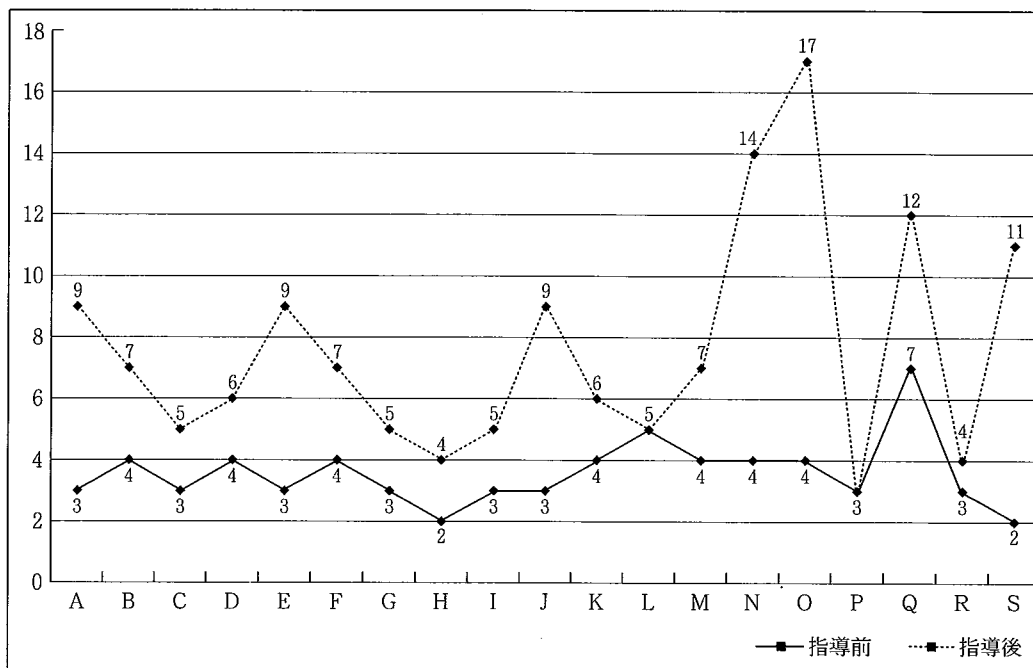


図 文献検索数の変化(グループ別)

ことで『CDC 感染ガイドライン』(2000年)を入手して、研究方法の信頼性・妥当性を確認する資料に役立てているグループもあった。

4) 「用語定義」

調査研究や実験研究などの実証的研究では用語の定義を行い、用語を変数にまで具体化する必要がある。12の調査研究で用語の定義を行っていたのは、C・F・M・N・Oの5グループのみであった。これらの研究グループは用語定義に対する認識があり、研究テーマや研究目的、仮説、概念枠組み、仮説に用いられる用語の定義を行っていた。他のグループの用語定義に対する認識は、研究で用いる用語が、“一般的でない”あるいは“人によってとらえ方が異なる”といった漠然としたものであった。

そこで、研究実施者が用語定義に対する理解を高められるように、臨床例が多い糖尿病を素材として取り上げた。「2型糖尿病患者の教育入院前後におけるセルフケア行動と心理的側面の変化」というテーマの場合、研究上でセルフケア行動という概念を具体的な内容に限定し定義しなければならない。セルフケア行動とは、「セルフケア行動変容プログラムと同様に、学習理論、認知行動療法、保健行動モデルを参考にした食事・水分管理などのセルフケア行動を変容させていく実践的なプログラム」と記述する。この場合の用語定義は、教育入院前後の効果の指標は検査データのHbA_{1c}であり、糖尿病患者はインスリン非依存型糖尿病で食事療法、運動療法、服薬療法を行っていても、インスリン療法は、行っていない患者と定義する。

このように研究実施者への指導においては、研究計画書で用いる研究テーマや概念枠組み、研究目的の関連性を考慮した説明を行った。

5) 「概念枠組み」

19グループのうち概念枠組みを明示できたのはA・B・C・F・H・J・L・Mの8グループであり、その明示の仕方もほとんどが

図式化であった。そのうち、A・B・F・Mの4グループは、既存の理論やモデルの枠組みを使用していた。Cグループは、概念枠組みを文章で説明していた。概念枠組みを文章化することで研究実施者の考えや判断が明らかになって、先行研究についてその事象がどこまで明らかになっているのか、どのような条件下で概念と概念の関連を検証したいのかなど、詳細に記述でき、改めて調査目的、方法、内容を検討する機会にもつながっていた。

その他のグループの研究実施者は、概念枠組みの構築の際、上位概念や下位概念の取り扱いに混乱が生じ、不明瞭になってしまい、明確な概念枠組みを設定することができなかった。この結果を生じさせたのは、筆者自身の「研究における概念枠組みの位置づけ」や「研究における概念枠組みの使い方」などの知識が十分でなかったことも関連していた。

6) 「研究方法」

研究方法の内訳は、19グループ中12グループは調査研究(63.2%)で、7グループは事例研究(36.8%)であった。実験研究に関しては、人間を対象に実験デザインを用いることが倫理的・人道的にできにくい状況や病院施設という制約的な条件からも研究するグループはなかった。

調査研究での測定用具や調査票など事前の信頼性や妥当性を検討する予備調査は、C・D・F・M・O・Pの6グループが行っていた。特に、C・F・Mの3グループに関しては、それぞれのグループの研究実施者は、研究課題に応じた調査方法を決定するための研究論文の検討を行い、調査内容や調査項目を抽出する作業を円滑に進めていた。

Mグループの「当直勤務における看護師のストレスの実態調査」では、次のように研究方法を記述していた。

第1段階では、救急外来の看護職のストレスとバーンアウト研究のレビューを行い、ストレスとPines Burnout Measureの日本語

版^{註)}のバーンアウトの概念、その関連要因についての概念整理を行う。第2段階では、実態調査に先立ち看護師にインタビューによるストレス項目の検討を踏まえた上で、質問紙調査項目の妥当性について検討する。個人属性(キャリア・当直経験年数含む)、12のストレス体験頻度「大いにある、多少ある、余りない、全くない」の4件法で尋ねることや、21のバーンアウト関連項目の体験頻度「1. 全くない」～「7. いつもある」の7段階で尋ね、その尺度としてバーンアウトスケール指数を3.0以上とすることなど、測定尺度について検討する。第3段階では、当直勤務をしている看護師を対象に質問紙調査を1カ月間実施し、看護師のバーンアウトと職務ストレスの関連について検討する。第4段階は、当直勤務における安全な医療行為の実施、患者・医師・同僚との良好なコミュニケーションが図れるような病院環境改善づくりに役立てる。このように、研究方法を順序立てて、属性、臨床的特性、調査項目、測定尺度、分析方法などを簡潔にかつ具体的に記述することができていた。

調査研究のなかでも、E・Qの2グループのような準実験デザイン(1群の事前・事後テスト法)で実験的操作を加える研究では、対象者に対する研究趣旨の十分な説明や、自由意志による途中脱退が可能であることを説明し、理解を得るといった慎重な倫理的配慮が必要であることを助言した。

事例研究の7グループのうちA・G・J・K・Rの5グループは、単一事例デザインを用いていた。事例研究の場合、1事例であっても文献検討や統計資料を用いて研究するに値するという裏づけがなされていた。

7)「データ分析」

データの分析や統計処理を事前に決定し記述していたのは、D・F・M・Oの4グループで、いずれも調査研究であった。Dグループでは、生のデータの使用ならびに分析する

ことを記述していた。

F・M・Oの3グループでは、データを分析可能に転換するコーディングについて行われていた。しかし、事例研究を除いた8グループについては、データの分析方法と概念枠組み、仮説などに関連性が見られないものが多くあった。これは研究計画書提出の6月時点では実際にデータを収集することが少なく、研究実施者が分析の方向性について、具体的なイメージができていないこと、分析に関する文献検索の少ないことが影響していた。

事例研究の7グループのうち、A・G・J・K・Rの5グループは、対象のありのままを見つめるために、対象の言動とその変化、看護師の言動とその意図などを詳細に記述する質的分析方法であった。質的分析方法であるため情報にバイアスが起こらないように、研究実施者以外にも、スタッフメンバーでの意見交換や意思統一を図るためのカンファレンスを定期的に行う必要性について助言した。

また、仮説検証型研究のE・Iの2グループは、シングルケース実験デザインであるため、看護援助の前の基礎的なデータや援助時のデータなどの信頼性・妥当性を確保するためにも、医師や臨床検査技師に研究の協力依頼を行うように助言した。

3. 過去4年間の院内看護研究の推移と研究成果の臨床への活用状況、及び院外での看護研究発表の状況

1) 看護研究実施状況

過去4年間の看護研究数の合計は19例であり、看護研究の方法別に区分すると調査研究12件(63.2%)、事例研究7件(36.8%)であった。なお、「IV-2-6)の研究手法」で述べたように、実験研究は行われなかった。年次毎に、看護研究数を方法別に見ると、平成14年度では4例のうち調査研究3例で事例研究1例、平成15年度では5例のうち調査研究2例で事例研究3例、平成16年度では4例のうち調査

研究2例で事例研究2例,平成17年度では,6例のうち調査研究5例で事例研究1例であった。

2) 研究成果の活用状況

D・E・I・Qのグループは感染経路や感染管理に関する研究であり, C・Rのグループは家族ケアや患者の動機づけや意識を高めるアプローチなどの研究を行っていた。また, F・Mのグループのように意欲的に看護に取り組むための組織システムの改善となる看護管理の研究も行われおり, 日々の看護実践に活用し得る内容であった。また, B・G・I・N・Rのグループは同一病棟で, セルフケアというテーマにこだわり続け, 視点を変えて看護研究を継続させていた。

また, C・H・I・J・P・Sのグループのように一般内科病棟でさまざまな疾病をもった患者が入院した状況下で, 特定の疾病や領域の看護に対する知識や技術より, あらゆる疾病をもった患者に対応した看護ケアの質を高めるための研究が行われていた。なお, 院外の学会発表は平成14年度～平成16年度いずれも3件で, 合計9件であった。

V. 考 察

1. 「看護研究」研修の意義

研究プロセスを進めることは, 関心領域における学習および先行研究を批判的に吟味して, 看護への貢献のために何を明らかにするかを考えることである。実際に収集したデータをまとめ, 既知の事実と擦り合わせて再吟味し, 明らかになったことを学会発表や論文にまとめて人に伝えていく作業でもある。この作業そのものは批判的な思考能力を養い, その能力は根拠に基づいた看護ケアを実践する上でも必要となる。「看護研究」研修では, 研究計画書作成段階から発表まで直接指導することで, 研究の基礎能力と批判的な思考能力を養えると考えられる。

「看護研究」研修を経た看護師は, 次に主

研究者の補佐として, また, 研究をリードする者として成長していくことが期待されている。「看護研究」研修を積み重ねていき, 研修を受けた看護師が多くなることによって, 研究テーマの設定や文献活用が行われ研究プロセス上の困難さも克服され, 主体的に研究に取り組むといった土壌が整うのではないかと考えられる。

なお, 筆者への依頼内容である看護研究過程に関する指導内容・指導方法については, 次項で述べる。

2. 看護研究計画書の作成段階での成果と課題

看護研究計画書をまとめることは, 研究者の考えを整理することができ, 研究の目的を明確にし, かつ論理的に研究方法を組み立てることを可能にする。そこで, 「研究テーマの表記, 研究目的」から「データ分析」など, 研究計画書作成段階での課題となった事項の指導内容・指導方法のあり方について考察する。

1) 「テーマの表記, 研究目的」

臨床現場では問題となることがあり過ぎるため, 研究実施者はその問題のすべてを研究課題にするため, 研究目的の範囲が広がり明らかにしたい内容が定まらない傾向にある。研究目的で何を明らかにしたいのかが不明瞭なグループの研究テーマの記述は, 単なる看護介入の紹介としての記述にとどまっていたり, 看護目標に類似した記述であったりと研究目的が不明瞭になりがちで, 何を研究で明らかにしたいのかが明確に記述されていない。したがって, 研究テーマの記述には, 研究の目的と方法と対象の3要素を意識して成文化するように助言すると, 19グループ中11グループの研究実施者がテーマの修正(一部)や変更を行い, 研究目的が明確に記述されるようになっている。

また, 研究実施者が研究目的を記述する際

にもう1つ留意すべきことは、研究目的と看護目標に類似した表現とを混同しないようにすることである。研究に慣れていない研究実施者では、研究目的が看護目標や業務改善に類似した表現になっていることが、時々、見受けられる。例えば、「今回の研究を通じて、胃カメラ検査前の患者の気持ちを聞き、検査説明書を作成し、検査に伴う業務を標準化したい」という研究目的の記述は、業務改善を目標にした記載であり、研究目的は曖昧になっている。「新たに作成した胃カメラ検査説明書の有効性について検証したい」に修正すると、胃カメラ検査説明書の有効性の検証が研究目的となり、明確になる。

このように、研究目的を記述するときには焦点を絞り、かつ研究で何を明らかにしたいのかを明確に記述できるような助言を、研究計画書作成段階の初期に行うことが大切であると考えられる。

2) 「問題提起、動機」

「研究テーマ」から「問題提起」までは、研究課題を導いていく思考の道筋を説明した部分である。ここでは、文献検討や予備研究などによって得た知見を広く引用しながら、徐々に焦点を絞り、研究のなかで取り扱う事柄を明らかにしていく過程である。

Mグループのように、研究開始準備段階から研究に対する問題意識が、明確に記述できるグループもある。したがって、指導上の要点は、①研究テーマに関してすでに解明した部分は何か、これまで何がわかっているか。②未解明な部分や解明すべき点は何か。③なぜ、研究テーマが重要か。④この研究でどのような結果や新しい知見が得ると期待できるのか。⑤この研究をすることで、どのような貢献ができるのかなど、研究計画書作成段階の初期に添削し、研究実施者が「問題提起」や「動機」を明確にできるような指導・助言が大切となる。これらの要点を指導することにより、問題意識や研究課題が生成された過

程を具体的に記述できると考える。

3) 「文献検索」

看護研究の関係領域において今どのような新しい知見が発表され、議論されているのかを把握しておくことが必要である。それにはまず、研究論文を検索し、それを精読する習慣を身につけなければならない。L・Pの2グループを除いて他のグループの文献検索数は、指導後には若干の数字的幅はあるが多くなっている。黒田⁴⁾が指摘しているように研究対象領域の研究論文を十分に精読し、過去の研究状況を確認することは、その後の研究過程に影響を及ぼすことになる。

平成16年度から、H病院の「看護研究」研修に2編の研究論文の項目別のクリティークを企画している。このことにより、研究実施者は、研究論文をどのような視点・視野・視座に立って精読するのかを理解できるようになっているのではないかと考える。次年度も同様に、研究論文や院内研究発表の抄録についてもクリティークを実施し、研究論文を読む能力や研究素材を発見できる能力を育成したいと考える。

また、文献検索には研究の段階や場面に応じて、いくつかの種類があると考えられる。研究初期の研究主題が明確ではないときに行うブラウジング (browsing) から、研究主題に関する先行研究を過去にさかのぼってみていく遡及検索がある。さらに、実験や調査の段階で特定の事柄について検索する事項調査 (fact finding)、最新の情報について研究期間中に継続して追跡するカレント・アウェアネス (current awareness) など、研究段階と文献検索の関係性がわかるような指導が今後、必要であると考えられる。

4) 用語定義

研究テーマや研究目的、概念枠組み、仮説に使われる用語は、具体的で誰がみても明確なもの以外は、定義する必要がある。

そして、この定義は、この研究上でだけ使

われる定義であり、使用する概念を具体的な内容に限定して使用する。専門領域で議論されている定義と同じ必要はないと考えるが、ある学問領域で議論され定義があるにもかかわらず、研究実施者の全く個人的で独創的な用語の定義を行う場合もある。

専門領域で使われている意味と異なる用語の定義を採用する場合には、それを使うにふさわしい、妥当な理由を述べるような指導上の工夫も必要ではないかと考える。

5) 「概念枠組み」

概念枠組みは、複雑な現象をどのような視点(理論的基盤)でみるのか、どれくらいの範囲でみるのか、そして現象を説明する概念をどのように定義づけ、概念間の関係をどのように仮定するのかを示す系統図式である。既存の理論を概念枠組みとすることもあるが、先行研究の結果から概念枠組みを構築することもある。つまり、概念枠組みは、先行研究の知見や既存理論を利用し、また過去に行われた実態調査と研究者の現場経験から現象の概念化やモデル化を行い、その既存理論と自分で作ったモデルの擦り合わせをすませて作成された概念間の関係図である。この枠組みに完全に対応させているのが調査研究である。

臨床看護研究において、概念枠組みの作成は、現象を見る枠組みの妥当性を検討することであるが、同時に研究実施者の視点を明らかにする作業となり、さらには、看護観を問い直す作業ともなる。概念枠組みの作成は容易ではないが、これが明確であれば既存の理論を鍛える資料を提供し、先行研究との比較検討や看護の知識体系への位置づけがより可能になると考える。

具体的には、各研究テーマの先行研究の知見や調査で得た実証性が高いと思われる概念を用いながら、概念枠組みの例示を試み、研究者の理解につながるように努めたい。

6) 「研究方法」

調査研究では、調査内容や質問紙など調査

票の信頼性や妥当性を知るための予備調査の必要性について、研究実施者に理解されるような指導が課題となっている。

事例研究は非常に応用範囲の広い研究方法であるため、実験研究や研究のためのインタビューを行うのが困難な臨床現場での研究に向いている。しかし、「困った研究」から「事例研究」のレベルまで引き上げるには、普段からのその領域についてよく学び、考えながら事象を観察する姿勢が必要である。

また、いろいろな研究の要素を必要とする1事例研究から始めるのは、看護研究における質的研究のアプローチを学ぶうえで、最も適切な方法の1つではないかと考える。

7) 「データ分析」

調査研究は、綿密な計画を立てた上で調査を実施しないと無駄が多くなり、遠回りをする結果になる。統計処理についても同様で、明らかにしたい事象を形のあるもの、だれの目にも見えるものにするためには、どういう統計処理を、いつ頃行うのかという集計計画を予め立てておくことが肝心である。また、いくら綿密に作った集計計画でも、予期しない出来事がしばしば発生する。したがって、1つの工程が終わったら、その段階で丁寧に終わった作業の整理をしておくことが必要である。

また、集計を容易にするために行われるコーディング作業(コーディング・マニュアルやコーディング・シート)は、転記ミスを最小限にするために2人以上でチェックし合うことを助言していきたい。

さらに、研究計画とデータ分析に一貫性がないことについては、解くべき課題の設定や調査目的の明確化、データに関する考え方、データ収集法、さらには、分析後の問題発見などの一連の研究過程の流れのなかに、データ分析を位置づけことが重要であると考えられる。

事例研究については、人間の体験や人間の相互作用、あるいは健康にかかわる諸々の現

象について、広く深く探求して、患者や家族に対する適切な看護ケアを生み出すことができると考える。今後は、記述の真実性と鮮明性からみる信頼性、研究結果が意味あるもので他の状況にも応用可能であるとする確証性、他の研究実施者であっても同じ意思決定を下すという監査可能性などの評価により、研究結果の真実性を示すことができるような指導が課題である。

3. 研究成果の活用

看護職が専門職である限り、看護学領域ならびにその最新の研究論文に目を通し、日々の看護実践に活かしていくという課題に取り組んでいかなければならない。また、臨床現場の看護ケアの見直しや業務改善などの「看護研究」を行い、よりよい看護実践につなげていくことも、看護師としての重要な役割のひとつであると考え。看護実践家に必要とされる研究への取り組み方の指針では、「学士課程で育成される看護実践能力の大項目・細項目」⁵⁾が示されている。このなかで、看護実践家に求められる能力として、看護実践の充実にかかわる研究成果の収集と実践への応用ならびに看護実践を重ねる過程での専門性を深める方法の修得の2点が記述されている。

H病院での研究テーマは、臨床現場に根ざしたものであり、実践に活かせるものを目指している。表2に示すように、調査研究や事例研究を行い、「感染予防」「家族ケア」「患者教育」「自己管理支援」「看護ケア」「看護管理」など、その成果を実践に応用する努力がなされている。このように、「看護研究」は臨床現場における看護実践の向上に確実な足がかりとなり、「看護研究」の意義が認められているのではないだろうか。

また、「看護研究」の研究成果として、看護学会での発表の機会を得ることも徐々に定着しつつある。研究成果が一般に広く活用され

るためには、信頼性や妥当性のある質的レベルの高い研究を行っていくことも必要ではないかと考える。

まとめに代えて

筆者は、看護の質の向上をはかるひとつの方法として、多くの看護師の研究的視点を啓発することが効果的ではないかと考えている。病院での看護研究のあり方としては、日常の看護現場のなかに看護研究の対象として取り上げたいテーマを見出して、研究計画を立て、研究発表や論文としてまとめていくような臨床看護研究が多く行われ、その研究成果が患者・家族に還元されることが望ましいと考えている。

日常の看護の過程は、看護研究の過程と共通点が多く、臨床現場の看護師が看護研究に取り組むことは、看護実践とまったく違ったことをするわけではない。看護研究に取り組むことにより、看護での問題点や疑問点を見出す視点が養われ、問題の解決や改善を計画的に行う手法を身につけることができる。さらに、文献検討や理論的に考察する習性も身につつき、看護活動全体を前向きに取り組む意欲がより出てくるのではないかと考え、看護研究の裾野を広げるために「看護研究」の指導を続けている。

また、看護師の看護研究の取り組みが院外的にも少しずつ評価され、学会での発表機会を得られるようになっていく。今後も、看護研究指導を通して、研究的視点の啓発と支援に取り組んでいきたいと考える。

註

Pinesのバーンアウトは、「無力感や絶望感、情緒的緊張、否定的自己概念、仕事や人生あるいは周囲の人々に対する否定的態度などにより特徴づけられる身体的疲憊」と定義している。(Pines, A. M. (1981) The Burnout Measure, Paper presentation at the

National Conference on Burnout in the Human Service, Philadelphia. を稲岡文昭が訳し、「看護婦にみられるBURNOUTとその要因に関する研究」と題した論文を『看護』(1984)に掲載した。

引用文献

- 1) 杉下知子他：臨床看護者が看護研究に取り組む姿勢。看護展望, 19(7), 45, 1994.
- 2) D. ディナー, 小島通代他訳：看護研究－ケアの場で行うための方法論－, 日本看護協会出版会, 東京, 1996, p.2.
- 3) 同上, p.107.
- 4) 黒田裕子：黒田裕子の看護研究 step by step, 第2版, 学習研究社, 東京, 2001, p.40.
- 5) 日本看護系大学協議会広報・出版委員会編：看護学教育Ⅱ－磨く・育てる・動かす－, 日本看護協会出版会, 東京, 2005, pp.106-107.

参考文献

- 1) 松木光子, 小笠原知枝編集：これからの看護研究－基礎と応用－, ヌーベルヒロカワ, 東京, 2003.
- 2) 新田紀枝, 阿曾洋子他：看護に関する実験研究の国内外の比較。看護研究, 37(1), pp.37-48, 2004.
- 3) 鍵和田京子, 石村貞夫：よくわかる卒論・修論のための統計処理の選び方, 東京図書, 東京, 2001.